

戦争における性淘汰・血縁淘汰・群淘汰

——社会生物学アプローチの可能性——

奈良大学 尾上正人

1 本報告の目的

社会生物学アプローチの、機能主義社会学や合理的選択理論などとの大きな違いは、分析の単位として集団・組織や社会全体よりも個体（さらにはその背後にある遺伝子）を重視するだけではなく、個体自身の行動原理として生存（そのための個体の利得の最大化）ではなく繁殖を最重要視する点にある。この観点からすると戦争は、個体の生存と繁殖が鋭く天秤にかけられる場所、さらに言えば個体自らの生存を危険にさらしてまでも繁殖が優先される場面であると定式化できる。戦争に繁殖がどう関わっているかという問いを以下では、性の問題と、集団・血縁者の存続・繁栄の問題に分けて論じたい。

2 戦争における性淘汰と性暴力

戦争は歴史上ほぼ普遍的に、専ら男どうしで戦われてきたにもかかわらず、その性的な偏りの意味が社会学において十分考察されてきたとは言い難い。その意味とは、繁殖相手をめぐる紛争、性淘汰である。戦争は性淘汰という繁殖上の機能を果たしてきたということだ。例えば、父から息子にのみ受け継がれる Y 染色体上にある遺伝子解析の結果から、現在の中央アジア男性の 8.5% がチンギス・ハンカその兄弟の子孫であることがわかっている。また、好戦性で有名な南米ヤノマモ族の一村長と人類学者 N.A. ジャグノンの会話で第二次世界大戦が話題になった時、村長が「米国人は女を盗まれたからドイツを襲ったんだよな？」と問うたのをジャグノンが否定すると、大層驚いたという。ヤノマモの他村襲撃は女性の大量拉致を伴い、また戦いで多くの殺人をした男が多くの妻を得る傾向がある。戦争が、平時と異なるまたとない繁殖機会になっているという見方である。

昨今のテーマである戦時性暴力についても、このような戦争の本源的意味から問い直されるべきではなかろうか。

3 戦争により強く作用しているのは血縁淘汰か、群淘汰か

社会生物学アプローチが依拠している進化生物学の正統的立場（ネオ・ダーウィニズム）は群淘汰説を完全に棄却し、個体ないし遺伝子レベルの淘汰に照準する。いわゆる「種の保存」のために、人間も含む生物個体は積極的に自らの命を投げ出したり危険にさらしたりはしないということだ。この立場は血縁淘汰の原理、いわゆるハミルトン・ルール（包括適応原理）へと精緻化されて、真社会性昆虫の不妊ワーカーの行動の解明に貢献したが、人間社会の戦争にも適用可能性がある。例えば日本の特攻隊（いわゆるカミカゼ）に関して R. アレグザンダーは、本人の特攻志願・戦死による「名誉」がきょうだい始め血縁者の繁殖成功を高める仕組みではないかと述べている。

しかしながら、前節のような集団間の性淘汰現象として戦争を捉えるなら、種ではないが集団の保存のために自らの命をも投げ出す行動が敵対集団に対する戦闘での優位性をもたらし、結果的に血縁集団ではない集団のレベルでの繁殖格差をもたらしているという群淘汰的な解釈も成り立ち、また近年は復活を見ている（かつて社会生物学の主唱者であった E.O. ウィルソンや、ラディカル経済学から考古学に転じた S. ボウルズ & H. ギンタスなど）。

4 おわりに、問題提起——近代国民国家による戦争抑止効果

20 世紀は「総力戦の時代」であり、また「最悪の戦争の世紀」とよく言われるが、L.H. キーリーの推計によれば、戦争関連死亡率は 20 世紀の国民国家においてむしろ非常に低く（最も高いドイツ・ロシアでも年換算 0.15%、日本は 0.04%）、伝統社会の方がはるかに高く、チンパンジー社会の争いによる死亡率に近い。国民国家はナショナリズムを介して、それまでよりも戦争を常態化・悪化させたと考えられがちだが、統計的に虚心に見れば、いわゆる「場内平和」を実現するのみならず、戦時と平時を区別する観念を生んで平和な状態を引き延ばす効果を持ったと言える。